

〈特別寄稿〉

漢字文化圏における近代語彙の形成と交流

沈 国 威

はじめに

皆様、こんにちは。大阪からまいりました沈と申します。高知にはこれで2回目です。10年ほど前にこちらの先生と一緒にこの辺りで合宿をしたことがあります。合宿の内容は、「漢訳ロビンソン物語の研究」です。これは、1890年代、日本で翻訳された西洋の書物であります。当時まず、漢文で翻訳されまして、その後、また和解（わけ）という形で日本語に翻訳され、一般に広まりました。これにより、「冒険談」という西洋の当時の概念も日本に入ってきました。いわゆる未知の世界へ冒険していく、そのような近代の精神が日本で芽生えて、そして中国、あるいは韓国にも書物や言葉が伝わったということを確認させられた合宿でありました。今日は2回目、また高知という素晴らしい町にやってきました。これから、よろしくお願ひします。

東アジアと漢字文化圏

本日の話のテーマは、「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」です。まず、東アジアと漢字文化圏について話をしますと、漢字が使われているところは、中国、日本、韓国、台湾、香港、シンガポール、マレーシアなどで、漢字が言葉の記録に使われています。

このような地域は漢字文化圏と言います。日本では、漢字語が語彙全体の5割を占めています。一方、ベトナムと韓国は現在、漢字そのものが使われておりませんが、漢字の発音を持つ言葉、つまり、漢字語、或いは字音語がたくさん残ってしまっていて、その量は日本よりも多いです。韓国は6割強、ベトナムは大体7割に達しているという話もあります。これは日本語に大和言葉、つまり和語がたくさん使われているからです。韓国とベトナムは中国に空間的に近いせいか、昔ながらの在来語はその分少ないということにも関係しているでしょう。



漢字文化圏の同形語

漢字文化圏には、一つの大きな特徴があります。現在、あるいは歴史的に漢字を使用したことにより、発音は異なりますが、同じ漢字で表記する語が数多く存在しています。このような語を、「同形語」と呼んでいます。「大学」、「知識」、「国家」、「政府」、「政治」などは「同形語」の例です。

現在、漢字の字体には、中国では簡体字、日本では新字体とそれぞれ違いも生じていますが、中国清代の『康熙字典』が、今日の活字の字体の元になっており、そこに遡れば、同じ漢字が使われることとなります。だから「同形語」と称しています。「同形語」とは、同じ「文字列」でできた語のことで、もちろん発音は違います。

漢字文化圏の同形語

- ▶ (現在、或いは歴史的な)漢字使用により、漢字文化圏に「同形語」が数多く存在している。
- ▶ いわゆる「同形語」とは、同じ文字列で出来た語のことである。

同形語の由来と意味的特徴

「同形語」の由来ですが、日本語には、中国の古典にある言葉がたくさんあります。そして日本で作られた漢字語、いわゆる「和製漢語」も数多く存在しています。江戸中期以降、特に明治時代に入ってから、新しい漢字語がたくさん造られてきました。このような言葉は国語学界では「新漢語」と呼ばれています。

なぜ、このような「新漢語」が造られたかですが、「新漢語」は西洋からの新しい概念を取り入れるためのものです。だから、意味的特徴としては、抽象語彙、あるいは学術用語という色彩が非常に強いのです。ただし、教育の普及に従い、当時、非常に難しい学術用語も、今日では日常的な言葉として使われるようになりました。

同形語の由来と意味的特徴

- ▶ (旧)漢語：中国の典籍にある語
- ▶ 和製漢語：江戸中期以降の新しい漢字語、「新漢語」とも呼ばれる
- ▶ 新漢語は西洋からの新概念を表すために造られたもの
- ▶ 新漢語＝抽象語彙、知的語彙、学術用語

なぜ同形語が存在するのか？

なぜ、同形語が存在するかですが、古典語に関しては、中国の古典から借用したことで説明がつかます。中国の典籍になかった語はどうでしょう。可

能性としては、中国、韓国、日本、それぞれ漢字を使いますので、漢字で言葉を造る際、偶然に同じ言葉ができてしまうことが考えられます。しかし、同形語は、おびただしい数にのぼっているのです、とても偶然の一致では片付けられません。例えば日中の間では大体2,000語ぐらいの同形語が日常的に使われています。そのうち半分前後が中国の古典に存在しません。その全てが偶然にできてしまうとは考えにくいでしょう。

漢籍に出典のない語は、漢字文化圏のどこかで作られ、その後、全域に広がったと考えたほうがことの真相に近いでしょう。事実として、日本は、新しい漢字の創出に大きく貢献したのです。日本は早く紀元1世紀前後、漢字に遭遇しましたが、長い時間をかけて、漢字を吸収し、自分の文字として取り入れました。そして江戸中期から、意識的に漢字でもって新しい漢字語を作り出す力が備わりました。結論から申し上げますと、中国と日本は、新しい漢字語の作り手です。一方、韓国は殆どこの創作活動に関与しませんでした。それは、韓国は、中国、或いは日本以上に正統観念が強かったからだと思えます。中国も日本も新しい言葉を造るのには、それなりの抵抗がありました。中国の典籍にない言葉を造ることは、中国語では、「杜撰」と言います。「杜撰」とは、でっちあげるということで、現在の日本語の意味と少しずれています。しかし、江戸時代では中国と同じでした。新しい漢字語を「杜撰」することは、当時の知識人にとって、あまり望ましいことではありません。そのような発想が韓国、朝鮮半島ではより強かったせいか、あまり新しい言葉が造られませんでした。韓国語の中にある同形語は、かなりの部分が19世紀後期、中国か、日本から取り入れた新しい言葉です。

言葉には一つの宿命がありまして、作られた言葉は必ず定着するとは限りません。日本では、毎年、誰かが何かの拍子で流行語を造り出していますが、流行語大賞として話題になった言葉は、大体1、2年で消えてしまいます。言語社会が受け入れないと言葉は定着しません。そのようなことがありますので、新漢語も漢字文化圏の国と地域でいかに受け入れられたかが非常に大きな問題になります。

このように、漢字、同形語、あるいは新漢語に関しては、次のようなこと

なぜ同形語が存在するのか？

- ▶ 別々に作られた。
- ▶ 中国で作られ、日本に伝来。
- ▶ 日本で作られ、中国に伝来。
- ▶ 「語」の宿命：個人の創造と言語社会の受け入れ。
- ▶ 新漢語の創出と交流：共創・共有

が考えられます。つまり、一つは造り出すということと、もう一つは交流によって、漢字文化圏に拡散し、定着するということです。漢字で表現しますと、共創・共有ということ。今日はこの二つの側面から考えてみましょう。

西学東漸と新漢語

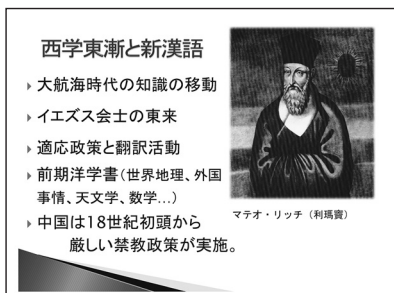
まず、創造ですが、いつから、新しい新しい漢字語が造られるようになったのかを少し考えてみましょう。16世紀以降の大航海時代の知識の移動に関しては、「西学東漸」という表現があります。西洋の学問が東洋にやってくるという意味です。「漸」というのは、少しずつやってくるということです。

「西学東漸」といえばこの写真の人物が連想されます。写真の人は、マテオ・リッチというイタリア人のカトリック宣教師で、中国名は利瑪竇です。マテオ・リッチが1583年、中国に入り、1601年前後に北京に入りました。北京入りを実現させた最初の西洋人です。

マテオ・リッチは、イエズス会（耶穌会）のメンバーです。そのような人をイエズス会士と呼んでいます。日本では現在、東京の上智大学や名古屋の南山大学はイエズス系統の大学であるということは、皆さんご存知かもしれません。イエズス会士はみな一流の学者で、布教のため中国にやってきます。最初は日本にも足を踏み入れましたが、後に関心は中国に向き始めました。なぜなら、当時の日本の学問は、中国から伝わってきたものという事実気づいたからです。そのため、まず中国を征服し、帰依させないと、多分日本も難しいということで、中国での布教活動を始めました。イエズス会の布教方針の特徴として、適応政策の採用です。つまり中国のような古い文化・文明を持っている国に対し、現地の文化を尊重しながら、布教活動を進めていく政策です。

適応政策の内容の一つは、翻訳です。宗教の書物だけではなく、西洋の知識水準が分かるような書物も翻訳しました。自分たちが野蛮人ではなく、相応の文化・文明を持っている人たちであると、中国人と同じくらい知識を持っていることを証明するために翻訳活動を始めました。

このような経緯で翻訳された書物は、前期洋学書と呼ばれています。前期



洋学書は、内容的には世界地理、外国事情、天文学、数学などの書物があります。翻訳された書物は、日本にも伝わりました。そして、日本でも当時の知識人の必読書になっています。日本では鎖国政策が行われ、外国から図書の輸入に関して厳しく制限をかけています。しかし、一旦日本へ入った書物は、その流通に関して、割合自由でした。そのため、そのような書物は抄写の形で日本でかなり流布されていたことがわかっています。例えば、関西大学の図書館にも当時の写本がかなりの量で取られています。

一方、中国では18世紀初頭から厳しい禁教政策が実施されるようになりました。翻訳活動もここで中断します。宣教師たちも追い出される羽目になりましたが、なかなか完全にはできなかったという側面もあります。

もう少しイエズス会士の翻訳活動を見ていきましょう。1601年、マテオ・リッチが広東に入ります。1608年に、中国の有名な官僚で大臣クラスの知識人の徐光啓の協力を得て、『幾何原本』という数学の書物を翻訳します。『幾何原本』は、早稲田大学にもあります。デジタル化され、インターネット上で自由にご覧になれます。

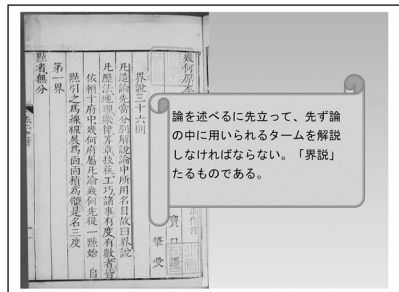
中国の場合1: イエズス会士らの渡来

- ▶ 1601年、マテオ・リッチ(利瑪竇)広東入り
- ▶ 1608年、中国士大夫
徐光啓の協力を得て
『幾何原本』(前6巻)刊行。



この書物の最初の部分に「界説」という段落があります。「界説」とは定義のことです。つまり書物の中で使われている言葉に対し、まず意味を厳格に定めておくことです。このようなことは、それまでに中国でも日本でもやらなかったことです。西洋の学問は、このような形で東洋に伝わりました。

マテオ・リッチは、定義の重要性を説明します。翻訳しますと、こうなります。「論を述べるに先だつて、先ず論の中に用いられるタームを解説しなければならぬ。『界説』たるものである」。この第1巻では、36の用語について解説を加えました。例えば、最初は、「点」です。「点」は、面積を持っていないことをここで言っています。次の項目は、「線」で、「線」というものは幅を持っていないと述べています。そのような形で定義してから、書物



の中で使います。

このような方法には、おそらく中国の当時の翻訳者たちも非常に驚き、新鮮に感じたと思います。

イエズス会士らによる造語

イエズス会士たちは、さまざまな書物を翻訳しました。翻訳された書物は、中国の最大の書物群、『四庫全書』にも収められていました。これは、西洋の知識が中国の学問体系に組み込まれたことを意味し、政府の公認を得た印です。

イエズス会士がどんな新語を造ったかを見ていきます。まず、宗教では、「天主」、「基督」、「使徒」、「洗礼」という言葉が造られました。他にもいろいろあります。数学に関しては、「幾何」、「三角」、「直線」などの術語です。地理学に関しては、「地球」、「赤道」、そして「熱帯」、「温帯」、「寒帯」などを造りました。天文学では、「水星」、「金星」、「望遠鏡」、機械学では「重心」「運動」などを造りました。ほかにも、「医学」、「理科」、「文学」、「大学」、「法律」などの語が、宣教師の翻訳書に使われております。イエズス会士が作った言葉の多くは、今日まで生きています。

しかし、中国では1720年代から、キリスト教の布教が禁じられるようになります。宣教師は海外に追放され、公に中国での活動は禁じられました。プロテスタントの宣教師が再び中国に足を踏み入れるのは、19世紀に入ってからです。

イエズス会士らによる造語

- ▶ 宗教: 天主、基督、使徒
- ▶ 数学: 幾何、三角、線、直線
- ▶ 地理: 地球、熱帯、温帯、寒帯
- ▶ 天文学: 水星、金星、望遠鏡
- ▶ 機械学: 滑車、重心、運動
- ▶ 医学: 骨髓、視力、膈膜
- ▶ その他: 理科、文学、大学、法律

中国の場合2：新教宣教師の来華

百年近くの断絶を経て、1807年にイギリス人の宣教師、モリソンが、広州に入ります。厳しい禁教下で、東インド会社の通訳官という身分で広州に滞在することになります。モリソンは、おおっぴらに宣教することはできませんので、次に来る仲間のために辞書を

中国の場合2：新教宣教師の来華

- ▶ 1807年、モリソン(馬礼遜)が広州に上陸。
- ▶ モリソンによる初の英華字典(1815-23)
- ▶ 文書布教と中国語学習、waiting for China、アヘン戦争の後(1842)、翻訳・出版が活発になる。
- ▶ 1850年代、広州時代: 惠愛医館(一般民衆が対象)
- ▶ 1860年代、上海時代: 墨海書館(中国知識人の協力)
- ▶ 1870年代、北京時代: 同文館(政府主導)
- ▶ 翻訳方法: (同文館以外は) 西洋人口述、中国人筆録。

作りなさいとキリスト教の組織から言い渡されまして、モリソンは苦難の末、6冊からなる大部の英華字典を作りました。

モリソンの英華字典は、1815年から1823年まで8年かけて編集され、刊行しました。この字典は、すぐ日本にも伝わってきました。高価のため、写本の形で流布しました。現在、四国の図書館にも写本が所蔵されています。

実際の宣教ができないので、文書による布教という方法が考え出されました。つまり、書物や簡単なパンフレットを作り、無料配付することにより、キリスト教を広めようとしたのです。中国本土では、文書布教に対する取り締まりが非常に厳しいので、宣教師は南洋、例えばマラッカ辺りに逃れて、大がかりに布教関係の書物を出版し、中国に持ち込み、配布しました。

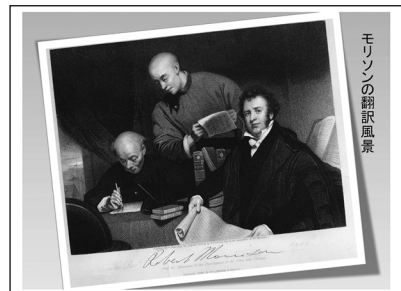
宣教師の言葉で言いますと、「waiting for China」となります。翻訳すれば「中国の開門を待つ」ということになります。1840年、アヘン戦争が起り、西洋人による翻訳、出版が許されるようになり、活発化していきます。

1850年代は、広州時代と呼べるでしょう。一般民衆を対象とする病院や教育施設がオープンされました。しかし、広州時代は短かったです。宣教師はすぐ上海のよさに気づき、布教の中心を上海に移しました。1850年代後半、聖書などの宗教書のほかに、雑誌、一般書の翻訳書も上海から多く出版されました。

同時に、都の北京は清政府の非常に強いコントロール下にありましたので、上海とはまた別のアプローチが始まりました。官立の外国語学校「同文館」が設置されました。

当時の翻訳方法は、西洋人が原書の内容を中国語で外国語の分からない中国人助手に伝え、書き留めさせ、推敲添削を経て、一つの翻訳作品に仕上げていくという形を取りました。「西洋人口述、中国人筆録」と言います。北京同文館の学生は少しばかり翻訳を実践しましたが、19世紀の翻訳は西洋人が主役でした。

ここでは、当時の翻訳風景を描いた絵を見て見ましょう。右側がモリソンです。そして、左側の中国人がモリソンの口述を書き留めているところでしょう。このように2人の中国人助手と協同作業の形で翻訳しています。これがマカオでの翻訳風景です。もう一



つの絵に同じくイギリス宣教師で、メドハーストのものです。メドハーストは、ジャカルタなどで布教をしており、後に上海布教拠点の責任者となり、たくさんさんの翻訳書を世に送りました。1837年、最初の英語・日本語・中国語の語彙集を辞書の形で作りました。日本の漂流民が日本語の知識を提供したと言います。



プロテスタントの宣教師たちは、非常に多くの書物を翻訳しました。先ほど述べました前期洋学書に対して、こちらは後期洋学書と言います。後期洋学書に作られた言葉には、次のようなものがあります。

まず、数学の用語が数多く日本語に入りました。「指数」、「関数」「微分」「積分」などです。数学用語は大きく宣教師らの造語に依存していると言ってもいいです。

地理学では、東西の国名、地名の多くは中国由来です。英国、米国、仏蘭西、伊太利、西班牙などが良い例です。アメリカは中国ではいま「美国」と呼んでいますが、鴉片戦争まで「米国」と呼んでいました。西洋の国名が中国語と関係ないのは、ドイツとロシアくらいです。ドイツはまだ統一国家をなしていませんし、ロシアは江戸中期からずっと日本の悩みの種であって、それなりの名前と呼ばれていました。国名だけではなく、都市名も中国から入って来ました。「巴里」「倫敦」「華盛頓」などです。もう1つ有名な例は「半島」です。

新教宣教師らの訳語創造

- ▶ 数 学: 指数、関数
- ▶ 地理学: 半島、東西の地名
- ▶ 化 学: 化学
- ▶ 機 械: 引力、螺旋、重点
- ▶ 医 学: -炎
- ▶ その他: 銀行、陪審、保険

※人文学の用語は立ち後れている。

その他にも、例えば、「化学」という語が中国から入ってきたもので、機械学では、「引力」「重点」、物理学では「電気」「電流」「電池」なども中国製です。医学も多少あります。漢方の勢力が強すぎるせいか、解剖、病理、病名の場合、中国製のものが多いが、「-炎」、例えば「肝炎」「肺炎」「脳炎」などは中国製です。先ほど申し上げた広州時代の訳語の多くは、その後上海の訳語に取って代わられたが、「銀行」、「陪審」、「保険」だけ残り、漢

字文化圏に広がりました。

ただし、中国の人文科学の用語は非常に遅れていました。実学の方はいろいろありましたが、哲学を始め、人文学の言葉はほとんど皆無に近い状態です。以上は、中国での新語創作の大体の状況です。

日本の場合1：蘭学の勃興

今度は日本を見ていきましょう。新しい漢字語を造り出したのは中国だけでなく、日本も大きく貢献しました。それでは日本人はいつから意識的に漢字語を作ろうとしたのか。なぜわたしはここで「意識的に」を強調したのでしょうか。平安時代以降、日本です

で漢籍にない漢字語が発生しました。但しそれは、創作というより誤用、或いは変用といった類いのものです。つまり偶然の間違いからできた語です。意識的な漢字語創作は、やはり江戸中期の蘭学からだとなつてははずと前から主張しました。いわゆる蘭学は、オランダ語による西洋の新しい知識の取り入れです。蘭学者は何よりもまず用語の問題に出遭います。というのは、中国から伝わってきた概念ならすでに漢字の言葉があります。例えば朱子学は新しい学問ですが、そこにある朱子の用語を理解できればよく、別に新しく漢字語を造る必要はほとんどありません。しかし西洋の新しい知識を取り入れる場合そうは行きません。

本格的な新語創作は、1774年に公刊された『解体新書』からでした。ご存じの通り、『解体新書』は最初のオランダ語の翻訳書です。漢籍や漢方の用語は、もうそれだけでは足りません。では、なぜ漢字で新語を造らなければならないのかという疑問が湧き出ます。一つは、当時漢文が東アジアにおいて唯一の学術言語だからです。つまり公式の書記言語は、漢文以外は存在していません。漢文には漢字語が用いられるのは至極当然ですね。

もう一つは、漢字語の簡潔さと造語力と関係します。複雑な概念なら和語が非常に長くなります。長くなるだけでなく、和語は圧縮がきまきません。これは多分、朝鮮語やモンゴル語など、アルタイ言語の特徴ではないかと思えます。例えば、大阪大学は、「大大（おおだい）」や「さかだい」とは言いません。神戸大学も「神大（こうだい）」や「かみだい」とは言いません。

日本の場合1：蘭学の勃興

- 日本はいつの時代から漢字語を作り始めたのか？
 - 『解体新書』の翻訳と刊行(1774)
- なぜ新造語するのか？
 - 漢籍にない新しい概念の受け入れ
- なぜ漢字で造語するのか？
 - 漢文は東アジアにおいて唯一の学術言語
- どのような方法で新語を造ったのか？

それぞれ「阪大（はんたい）」、「神大（しんたい）」と言います。日本語の略語は、外来成分によってのみ実現可能です。パーソナル・コンピュータは「パソコン」となり、さらにパソコン室となれます。和語だけでは難しいです。

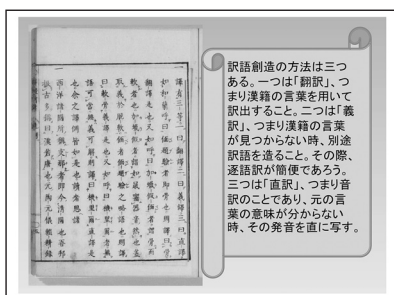
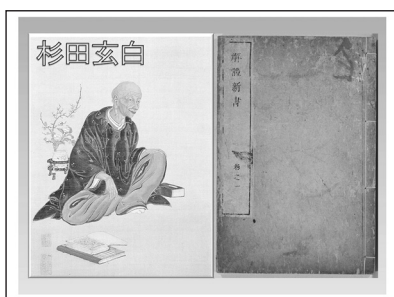
もう一つの理由は、中国人も知らないことをやって退けて、ぜひ読んでほしいというような気持ちがあったと蘭学者が回想録に書いています。これが、後から付けた理由なのか、翻訳当時にこのような発想があったのかは定かではないのですが、翻訳した以上、当時の漢文・漢字は東アジアでは一種のリンガフランカ（共通語）のような存在で、日本だけではなくもっと広く読んでもらおうという発想があってもおかしくないと言えます。

それでは、新語はどのように造られたのでしょうか。杉田玄白が『解体新書』巻頭に次のように記しています。

訳語には、3種類あります。一つは「翻訳」、もう一つは「義訳」、三つ目は「直訳」です。「翻訳」とは、漢籍にある語を訳語として用いることです。漢籍にある由緒正しい言葉を使うわけです。二つ目は「義訳」ですが、「義訳」というのは、漢籍の言葉が見つからない時は自分で造らなければどうにもならないので、敢えて造ります。三つ目は「直訳」ということですが、今日の「音訳」に当たります。

「義訳」は新語を造ることに繋がりますが、蘭学の場合、よく逐語訳が用いられます。オランダ語では、一つの単語はそれぞれの意味に分解することが可能です。この点は中国の漢字と似ていますので、各部分に漢字を充てていくことにより新しい語ができるわけです。

杉田玄白は、「軟骨」の例を挙げました。オランダ語は、「やわらかい」と「ほね」の二つの部分からなります。そこへ、「やわらかい」に「軟」という字を充て、「ほね」に「骨」という字を充てると、「軟骨」ができました。今日、我々が充てるとすれば、この「軟」という字を使うかどうかはわかりません。現在の常用漢字表では、この「軟」という字は、「やわらかい」と読

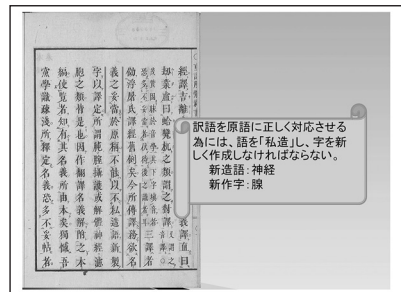
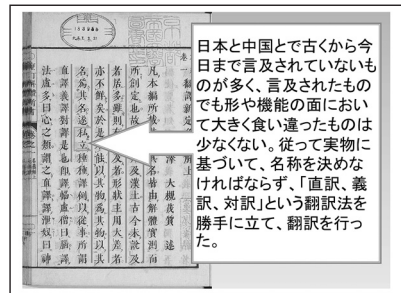
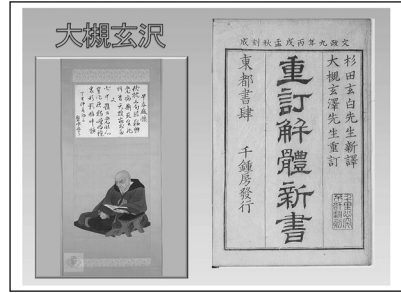


まれていないからです。「やわらかい」は、「柔道」の「柔」という字を使うので、「柔骨」が出てきそうですね。これが、当時の漢字の知識では、「軟」という字が使われました。

『解体新書』では、このような三つの方法で訳語が作られました。『解体新書』が出版され、半世紀が経ったころ、改訂版が出されました。1826年のことです。改訂版は、杉田玄白の弟子、大槻玄沢の手によるもので、『重訂解体新書』という書名で世に送られました。改訂版は分量を大きく増やし、12巻となりました。最初の4巻は、いわゆる『解体新書』です。5巻から10巻まで『新定名義解』で、11巻、12巻は付記、つまり翻訳のメモです。『新定名義解』は、訳語、或いは学術用語についての説明です。訳語の正当性を主張するところです。

何を書いたかをちょっと見てみましょう。大槻玄沢は次のように書いています。身体 の 部 位 や 身 体 の 器 官 に 関 して は、「日 本 と 中 国 と で 古 く か ら あ ま り 詳 し く 言 っ て い な い も の が 多 い」。たとえ言ったとしてもその形や機能の面においては、大きく食い違っています。漢方で言う五臓六腑を実際に解剖してみると、どこがどこなのかよく分かりません。したがって、『解体新書』を訳出する際、実物に基づいて、名称を決めなければなりません。つまり、解剖で見た事実に準拠し、新しく名称を造らなければなりません。その際、「翻訳」、「義訳」、「直訳」という方針を勝手に立てて、翻訳を行いました、と。

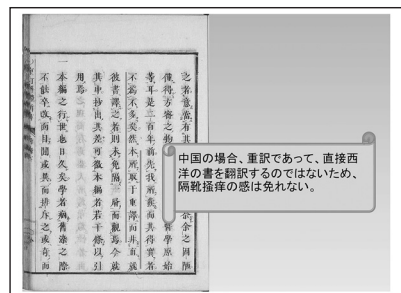
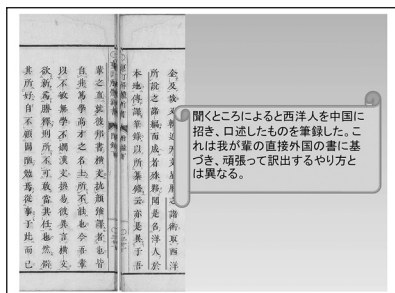
この「勝手に」という言葉は、なかなか面白いです。まだ正当性が欠けているということですね。「勝手に」というもともとの言葉は、「私造（わた



くしづくり)」で、密かに漢籍にない言葉を造り出す、恐れが多いことをしてしまったという気持ちがひしひし伝わってきますね。

しかし、これも仕方のないことです。原語に正しく対応させるために、訳語を造らなければならないからです。例えば、「神経」という語ですが、できれば「軟骨」のように逐語訳の形で作りたかったのですが、「神経」や「植物学」のような語は、原語において単純語であり、意味のあるパーツに分解できません。例えば、「ポタニー」は、どの部分が「植物」で、どの部分が「学」なのか分かりません。「神経」も同じことです。そのため、いろいろ思案をめぐらせ、その役割や機能を考えながら原語の意味を端的に表せる語を考案しなければなりません。

蘭学者は漢字による新しい複合語だけではなく、新しい漢字も造りました。新しい漢字も造るのはもっと挑戦的です。というのは、中国の知識人は漢字を造るのは、神様の仕事であると信じたからです。日本でできた漢字は、「和字」或いは「国字」と言います。これは大体無学な輩の好んでやることです。蘭学者は原則的に新しい漢字を造りません。稀な例として、「腺」という字があります。ここでは詳しく述べられませんが、「腺」ができるまで、いろいろな試行錯誤がありました。結局最後にこの「腺」に落ち着きましたが、これもいろいろ考えた上でのことです。「月」は、体を表し、「泉」は、体液が湧き出るという意味を表します。というのは、「腺」はリンパの一種でありまして、リンパ液が出ますから。



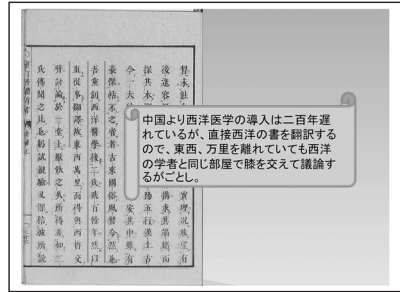
やっているうちに蘭学者は次第に自信が付き始めます。そして、中国と比較するようになりました。大槻玄沢はこのように言っています。聞くところによりますと、中国でもこういう洋学書が翻訳されています。中国に西洋人を招き、口述させ、その内容を筆録して訳書にするのが中国のやり方であります。しかし、日本では、我が輩は直に外国書を読み、頑張って訳出する方

法を取っています。「なかなか大変ですが、頑張って横文字を訳したのが我々の翻訳の方である」と自慢しています。

このような二つのやり方がどう違うかと言いますと、中国の場合は、自分が外国語が分からず、西洋人が口述した内容を書き留めるだけで、二番煎じというほかありません。これが「重訳」であり、隔靴搔痒という感は免れないのではないかと言っています。

日本の場合は、私たちは、中国より西洋医学の導入は200年も遅れています。大概は200年中国よりも遅れたと言っていますが、だいたい100年ぐらいです。しかし、私たちは直接西洋の書を読み、翻訳に取りかかりますので、万里離れていても、西洋の哲人、賢者たちと胸襟を開いて膝を交えて直接対話をしているようなものです。自信满满ですね。

蘭学者は、「躬試親験」をモットーにしています。何事も自ら実践し、真の知識を得ようとします。



日本の場合2：明治の新語・訳語

蘭学は幕末まで続きました。1840年代以降、兵学の書を翻訳するのが急務になっていましたので、医学、化学などの翻訳は後回しになりました。そして、時代が明治になります。それでは蘭学者がどんな言葉を作ったのかを少し見てみましょう。分野的に言いますと「医学」、「植物学」、「化学」、「兵学」、「言語学」などの術語がかなり整備されました。

言語学で言いますと、我々が今日使っている「動詞」、「名詞」、「形容詞」、「副詞」などがあります。これらの術語は、現在、中国だけではなく、韓国においても使われています。

蘭学の造語法が、そのまま明治の啓蒙者に継承されました。明治初期の啓蒙者たちは、みんな蘭学の出身です。かれらは蘭学の訳語創出法を、そのま

日本の場合2：明治の新語・訳語

- ▶ 蘭学の訳語：医学、植物学、化学、兵学、言語学
- ▶ 蘭学の造語法が明治の啓蒙者に継承された
 - 一、できるだけ漢籍のこぼれを使用：脂肪、革命
 - 二、漢籍にない場合、隠んで造る(私造)：神経、哲学
 - 三、できるだけ音訳語を使用しない、使用する場合でも仮名ではなく、漢字で表記する：普通、俱樂部
- ▶ 現代日本語彙体系の完成：明治20年代

ま英語の書物の翻訳に使いました。例えば、一番の原則はできるだけ漢籍語を使うこと、例えば、「脂肪」は蘭学者の訳語です。「革命」は明治の訳語です。「脂肪」は、もともと動物のことを言う漢籍語で、蘭学では人間に対して使うようになりました。「革命」も同じです。新しい意味を付け加えました。

次に、漢籍にない場合は、恐れ多いことですが、新語を造ります。蘭学者は「神経」という語を造りました。それ以外にも数多くありますが、明治に入ってから、例えば、「哲学」をはじめ、数多くの新語を造りました。

そして、第3の原則は、できるだけ音訳語を使用しないこと、やむを得ず、音訳語を使用する場合でも、仮名ではなく漢字で表記することです。そして、漢字の発音は、いわゆる日本の漢字音ではなく、中国の発音を使いましょうと申し合わせてあるようです。ここに出ているのは「曹達」、ソーダ水の「曹達」です。「そうたつ」とは読みません。中国語で読むとこうなると、蘭学者たちは言っています。明治に入ってから「倶楽部」という語が造られました。この「楽」も「らく」ではなく、「ら」と読みます。ただし、「倶楽部」に関してはよく分からないところがあります。英語の club は、もともと「苦楽部」と訳されています。苦楽を共にするというのでしょうか。一つの組織としては楽しいことだけではなく苦しいことも一緒に体験しようという理由でしようが、ある日、急に「俱」という字に変わったのです。その辺りの事情はよく分からないのです。分かっているのは、中国の駐日公使が東京紳士倶楽部に招かれ、講演を行った翌日の新聞に、この「倶楽部」が登場しました。推測の域を出ませんが、中国の駐日公使は「苦楽」よりは一緒に楽しむんじゃないかということで、「俱」の方がいいというアドバイスを送ったのかもしれない。

当時、中国の人たちはまだ日本にそれほど来ていません。一部の役人がやってきましたが、行く先々で漢字訳語にお墨付きのようなことを頼まれるのです。「衛生」も有名な例です。もともと日本では、「健全」や「厚生」という言葉が使われていたのですが、漢籍に「衛生」という語があるので、日本もそれにしようという発想で、「衛生局」と名称を変えました。名称が変わってから10年も経っているのに、視察に来られた中国の役人に「衛生」のネーミングの善し悪しに聞いたりします。やはり漢字の母国の人たちに意見を聞き、お墨付きをいただきたいという心理が働いたのではないかと思います。

現代日本語語彙体系が、明治20年代ころ完成を見ますが、言文一致運動や国語辞書『言海』（明治24）の出版が象徴的なことです。

明治の日本では、「お雇い外国人」というのがありました。外国から有名な学者を招聘し、日本の大学で教えさせます。英語を使ったりしましたが、明治20年前後から、日本語で授業ができるようになり、お雇い外国人の多くが契約を更新することなく、国へ帰りました。つまり、日本語でも新しい知識の伝授が可能になり、そこまで日本語は成長したということにもなります。

新語の創造者たち

ここでは、明治の新語創造者たちを見てみましょうと、西周が「哲学」という言葉を造りました。そして、福沢諭吉、我々は毎日よくお見かけいたしますが、この人は「演説」という言葉は自分が作ったと言っています。これは、事実とは少し異なります。福沢諭吉が造ったわけではなく、広めたのです。



西周の同窓生である津田真道は、西周と相談していろいろな言葉を造りました。「哲学」もおそらく津田真道が智恵を貢献したと思います。この人が「経済」という言葉を頻繁に使ったと言われています。加藤弘之は、初代の東京大学の総長を務めた人で、この人が「進化」という言葉を造ったのは有名な話です。このように、日本ではどんどん新しい漢字の言葉が造られたのです。

交流編

新語が誕生しますと、今度は普及と定着の問題が持ち上がります。以下、新漢語がどのようなプロセスを経て、今日我々の使う言葉になったのかを少し考えてみようと思っております。

考察の視点

まず一つは、「交流の時期」、いつ交流したのかです。もう一つは、「交流の媒体」、書物なのか人間なのかです。そして、「交流の内容」や「言葉の移動の方向」、つまりどこからどこまで、中国から日本なのか、それとも日本か

考察の視点

- ▶ 交流の時期
- ▶ 交流の媒体
- ▶ 交流のコンテンツ
- ▶ 移動の方向
- ▶ なぜ言語接触と語彙交流が発生したのか。

ら中国なのかということです。その根底には、言語接触と語彙交流がなぜ発生したのかを考えてみるのも面白いのではないかと思います。

中国から日本へ

交流といえば、まず中国から日本への流れが考えられます。これがいわゆる17世紀、18世紀のイエズス会士たちの書物です。これらの書物は、日本に入れば流通自体はそれほど制限されていませんでした。他の書物としては、漢籍や仏典、善人や善官になるための善書があります。庶民や低級役人に読ませるものですので、話し言葉が多く入っています。

今日の日本では、法律用語の一部にこのような言葉が入っています。例えば、「幫助」という言葉があります。「幫助」というのは、中国では手伝う、助けるという意味を持つ話し言葉ですが、日本では法律用語になっています。「関係」という言葉も中国では話し言葉で、もともとの意味は、「時間の関係でこの辺で終わりにします」というような「関係」で、「影響や必然の結果」という意味で使われましたが、日本では意味が変わり、両国関係、因果関係という意味で使われています。

イエズス会士らの著書、訳書、つまり、前期洋学書も多数日本に入りました。その内容は、数学、天文学、地理、博物学の分野の内容になります。

中国の禁教政策によって翻訳活動が低調になりましたが、1842年の鴉片戦争の後、翻訳と出版が再開しました。1859年ころ中国の書物が大量に舶来されました。なぜ1859年かというと、1859年になりますと、ペリー来航により、鎖国状態が解消され、中国からの書物が自由に日本に入ってくるようになったからです。ただし、商品として販売するのがいいんですが、復刻出版なら審査が必要です。高知の牧野富太郎植物園の図書室に、当時の宣教師が高知の大名に差し上げた『植物学』という本があります。1858年に出版されたば

中国から日本へ：第一波

- ▶ 時期：17～18世紀
- ▶ 書物1：古典、仏典、善書（善人、善官になるための書物）
- ▶ 書物2：漢訳洋書（前期洋学書）
- ▶ 内容：数学、天文学、地理、博物

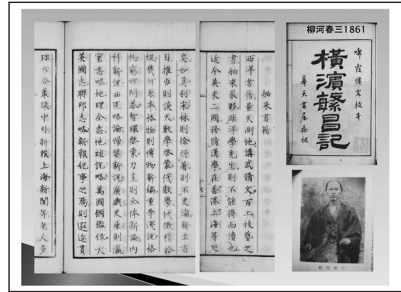
中国から日本へ：第二波

- ▶ 時期：1859～1890（明治20年代）
- ▶ 書物：後期漢訳洋書、英華辞書、新聞雑誌
- ▶ 人物：中国で活躍した宣教師、商人、外交官、文化人
- ▶ 内容：数学、天文学、地理、博物、医学、化学
- ▶ 漢学崇拜：幕末・明治初期は漢学崇拜の時代である。蘭学の訳語を捨て、中国の訳語に乗り換える例が多数ある。

かりの本で、宣教師本人のサインもあります。

この時期、日本に入ってきた書物は後期洋学書になります。数学、物理、博物学、医学、そして新しいものが2つ加わりました。1つは英華辞書、もう一つは新聞雑誌の類いです。福沢諭吉を含め、当時の人たちはほとんど英華辞書で英語を勉強しました。そのため、中国製の訳語などがそのまま日本語に入りました。

こちらは、『横濱繁昌記』という、当時読まれていた書物です。何を記録していたかといいますと、ここに、舶来書籍とあります。いろいろな書籍が舶来したわけです。書名も数多くここに挙がっています。中国の漢訳洋書は、日本でかなり読まれていました。有名なものに『博物新編』があります。この『博物新編』は、明治5年まで小学校の、いわゆる自然の教科書としてアレンジされて使われています。



そして、一番広がったものが『智環啓蒙』という本です。『智環啓蒙』とは、百科全書のミニ版、英語で100ワードぐらいの短い本文が中国語に訳されています。宗教の内容が削除された上で、復刻、或いは翻訳されています。日本では、明治5～6年までは英語の学習や漢字の学習のほかに自然教科書としても広く使用されました。中国の訳語がこのように日本に入ってきたのです。

それから、人的交流も可能になります。中国で活躍した西洋の宣教師や中国の商人、外交官、文化人が日本に入ってくるようになりました。特に西洋の宣教師たちは、中国で布教し、日本の開国を待って日本に入ってきました。ヘボンも中国での布教経験をお持ちですし、ブラウンという宣教師は、漢訳聖書を利用し聖書の日本語訳に努めました。

訳語の交替から見る時代の風潮

このように中国の書物が大量して日本に入りました。内容から言えば、数学、天文学、地理、博物学、医学、化学などと広範囲にわたります。また当時の世の中の風潮として、漢学崇拜と言われる時代で、漢文を読み、漢詩を作ったりしていました。夏目漱石は良い例です。そして、蘭学の訳語を捨てて中国の訳語に乗り換えるという訳語の交替の例も数多く発生しました。

例えば、それまでは「解体」と言っていたところ、「解体」よりは「解剖」が中国語らしいということで、「解剖」、「解剖学」と明治に入ってから使われるようになりました。今日は、「解体」は家屋の解体を言いますが、医学では「解剖」ですね。それから、「舎密」をやめて、「化学」に、「植学」をやめて「植物学」に、「健全」は「衛生」、「積極」「消極」という言葉も、「陽極」と「陰極」に変わりました。「越歴機（エレキ）」は「電気」、このように、今までの言葉をやめて、中国の言葉に乗り換えたということです。

訳語の交替から見る時代の風潮

日本の蘭学の訳語	漢訳洋書の訳語
解体	→ 解剖
舎密	→ 化学
植学	→ 植物学
健全	→ 衛生
積極・消極	→ 陽極・陰極
越歴機(エレキ)	→ 電気

日本→中国

中国から言葉を取り入れることは、明治20年前後でパタッと止まりました。中国では、それ以上新しい知識の提供ができなくなったからです。中国が時代の波に乗り遅れて、どんどん落ちこぼれていきます。そして1894年、日清戦争が勃発し、中国が負けました。

1895年以降は、日本からいわゆる漢字文化圏、朝鮮半島、台湾、そして中国本土に、言葉が広がっていく時代が来ました。日本の雑誌、新聞が中国に進出し、日本の漢学者たちも非常に活躍しました。漢学者というと、今日では少し古いイメージがあるかもしれませんが、当時の書物の序文には、中国文明に恩返しをしよう、中国の文明化が遅れているのでお手伝いしようというようなことが書いてあります。

写真に出てくる人たちを紹介しますと、こちらは藤田豊八で、後に、台湾大学の総長になった人物です。こちらは、古城貞吉という人で上海へ行って、日本新聞を中国語に翻訳する仕事を1年半以上現地でやりました。他に、内藤湖南、安藤虎雄いずれも、非常に優

日本→中国

- ・ 時期：1895年以降
- ・ 日本メディアの中国進出と日本の漢学者たち →
- ・ 科学廃止のため、中国人日本留学のブームが発生
- ・ 日本書の中国語訳
- ・ 黄金の十年：1900～1910
- ・ 西洋の学問は日本より来たる
- ・ 學術用語の多くは日本語に依存している

中国で活躍する漢学者たち



藤田豊八
『農学報』



古城貞吉
『時務報』

その他：岡本監輔、岡千仞、内藤湖南、安藤虎雄、興亜会（亞細亞協会）及び善隣書院の面々

れた漢学者です。また組織で言えば、興亜会、善隣訳書館などがあります。

19世紀末、言葉の流れが逆転しました。これまでの中国から日本へとではなく、日本から東アジアへとということになります。ここに有名な言語学者のサピアというアメリカ人が1921年にこのようなことを言っています。「何世紀もの間、中国語の語彙は朝鮮語、日本語、ベトナム語において氾濫しています。しかしながら、それらの言語から中国語は何も受け入れていません」と。これは全くの事実誤認です。20世紀に入ってから、日本語は漢字文化圏に発信を始めています。

逆転：日本語がアジアの言語に影響

- ▶ なん世紀もの間、中国語の語彙は朝鮮語、日本語、ベトナム語において氾濫している。しかしそれらの言語からは何も受け入れていない。(サーピア『言語論』1921)
- ▶ 19世紀末、日本語は漢字文化圏に言葉を輸出し始めた(先まずは朝鮮半島、その後中国)。中国にとって1904年ピークである。

中国語における日本語の影響について

以下、中国語に及ぼした日本語の影響について考えてみたいと思います。中国語における日本語の影響はどのような状況かと言いますと、発音に関してはほとんど影響がないということが分かります。そして、文法と造語法に関しては、接辞などがあります。例えば、近代化の「化」や、合理性の「性」、運転手の「手」、化粧品の「品」というものが中国に入って、中国語における接辞の発生、発達につながったと言えます。

そして、語彙の面から数多くの日本語が入っていきますが、どう評価するかという問題があります。日本語が、東アジアの言語、特に中国語にどのような影響を与えたかを感情的に語るのではなく、一つの客観的事実として見ないといけなないと思います。これが私の研究の中心テーマです。

中国語における日本語の影響について

- ▶ 発音：殆ど影響なし
- ▶ 文法と造語法：複合前置詞、接辞
- ▶ 語彙：影響大
- ▶ 語彙の面からどのように日本語の影響を評価するか？
- ▶ 中国語に及ぼされた日本語の影響はおおよそ次の3つのパターンである：借形語、借義語、刺激語。

日本語借形語

中国語に及ぼされた日本語の影響は、おおよそ次の三つのパターンであると言えます。

一つは、日本語からそのまま、つまり漢字の形で言葉を借りるというケー

スです。要は、語形が日本語から来るということ。これには二種類があります。1つは「哲学」や「義務」、「起点」、「神経」というような新しく日本で作られた漢字語が、中国語に借用されたものです。借形語の「形」は漢字のことを言いますが、日本で作られた新しい漢語が、「和製漢語」とも呼ばれています。ただし、「和製」とは言え、制作過程においては中国語的な要素も働いたケースが多く、そのため、このような言葉に関しては、中国人は割合違和感なく受け入れたということになります。違和感があるのは、第二類なのです。

第二類はいわゆる江戸語で、「取締」「打消」「場所」「場合」「引渡」などです。ほとんど法律用語として使われています。近代の法律用語には特殊な事情がありまして、江戸語も中国の俗語も日本では法律用語になり、後に翻訳書などを通じて中国語に入りました。元々は訓読みの言葉なので中国人にとって少し分かりづらいです。

日本語借義語

「借義語」とは、文字列は中国の典籍に見つかりますが、意味が変わり、現在日本語から借りた意味で使用しているものです。「革命」「経済」「共和」「民主」「社会」「関係」「影響」など数多くあります。言い換えれば、語の意味の拡大や更新が日本で完成されたのです。ただし、語の意味の変化に複雑な問題があります。中には仏典や禅宗語録に用いられた語の意味と近いものもあります。そのため、放っておいてもそのようなという主張も可能ですね。例えば「車」という字は、今も昔も使われていますが、指すものが違いますね。これが自然にそうなったのか、日本語の影響によってそう変化したのか、線引きが難しい面があります。

借形語と借義語は、これまでの日本語と中国語の語彙交流を考察する際、主な内容であります。意味上の特徴として、抽象語彙や学術用語が多い。ま

一、日本語借形語

- ▶ 語形が日本語から来る、第一類：哲学、義務、起点、神経、前提、団体、倶楽部
- ▶ 第二類：取締、打消、場所、場合、引渡…この部分は江戸語と言ひ、口語語彙で、数量も少ない。
- ▶ “借形語”は日本人に作られた新語で、“和製漢語”とも呼ばれている。但し制作過程に中国の要素が働いた。

二、日本語借義語

- 語の意味が日本語から来る：革命、経済、共和、民主、社会、関係、影響…
- “借義語”は主に漢籍、仏典、禅宗語録、白話小説、中国の実用書（善書）等。
- 意味の拡大、更新、変化は非常に複雑な問題である。

た数から言えば、両方合わせますと、おそらく数百語単位だと思います。日中語彙交流の辞書を作っている最中です。全部終えないと具体的な数字が弾き出せませんが、この一、二年で明らかにできると思います。

日本語刺激語

もう一つ、最近すごく強く意識して、私なりに強調しているのは、「日本語刺激語」です。誰も言ってはいませんが、私は最近「刺激語」はあるぞと事ある度に言っています。どういうことかと言いますと、日本の言葉の刺激を受けて中国で一般化した言葉で、これも2種類あります。

第一種類は、「望遠鏡」、「熱帯」、「寒帯」、「細胞」など中国で作られた言葉です。中国の16世紀末のイエズス会士たち、そしてプロテスタント宣教師たちが作った言葉ですが、中国ではいろいろな理由で広がらなかったのです。しかしこれらの語は書物を通じて日本に入ってきました。日本では大事にされ、一般化したのです。そして20世紀初頭、また日本の書物と一緒に中国に戻ってきました。里帰りしたわけです。語数はそんなに多くなく、20～30語前後です。

そして、第二種類は、「学校」「方案」「改善」「薄弱」のような一般語です。必ずしも新しい意味を表すのではないものです。このような言葉は、中国の古典を探せば出てきます。名詞だけではなく、動詞、形容詞、副詞などに広く分布しています。語数も最も多く、1000語超えると見積もっております。

中国の典籍に使用例があります。語源的にいわゆる「和製漢語」ではないのですが、日本語の刺激により、19世紀末、20世紀初頭になってようやく頻

日本語借形語、借義語概観

- ▶ 借形語、借義語は、日本語借用語の主要部分と考えられ、また研究の重点であった。
- ▶ 意味特徴としては、抽象語彙、学術用語、新しい事物の名称が中心である。
- ▶ 借形語が少なく、借義語が多い。
- ▶ 語数について考察中である。

*：中日近代同形語は5000語前後。

三、日本語刺激語

- ▶ 日本語刺激語とは何か？
- ▶ 第一種：望遠鏡、熱帯、寒帯、細胞など、中国16世紀末イエズス会士、或いは新宣教師らの訳語は直接現代中国語の語彙にならず、日本經由で中国語に環流した語。語数は多くない。
- ▶ 第二種：学校、方案、改善、薄弱などの中国古典語。名詞、動詞、形容詞、副詞に広く分布し、数千語に上る。

「活性化」とは何か？

中国の典籍に使用例があり、語源的にいわゆる「和製漢語」ではない。しかし頻繁に使用し始めたのが19世紀末、20世紀初頭である。「日本語刺激語」という命名は、中国語においては元々一語ではないが、日本書の中訳する際、その高い使用頻度の影響で、中国語でもすっきり1つの複合語となることを意味する。

繁に使い始めていました。では、中国の言葉なのに、なぜ日本の刺激を受けなければ中国一般に使われなかったのか。これは知識の移動と関係します。書物の翻訳によって現れた現象と言えます。語源がどうであれ、語の普及、定着に新しい知識の受容と関係があれば、もう少し詳細に把握しておかなければならないと考えております。

近代語彙の特徴付け：中国語と日本語

ここで強調したいのは、漢字文化圏の近代語彙の特徴です。

中国語では、近代語彙の特徴は次のように言えます。1字の在来語に対し、同じ意味の2字語（群）を用意すること、新しい外来の概念は、2字語で訳出することです。中国語では、同じ概念に対し、1字語と2字語の両方を用意しておかなければ、口頭表現の上とても不便です。2字語でなければ聞いて理解してもらえません（言文一致）。近代語の完成過程に、日本語の助けが存在していたのです。

では、日本語はどうでしょう。日本語も一つの大きな特徴があります。つまり、近代語へと変身するには、これまでの和語（大和言葉とも言いますが）に対して漢字語を与えないといけないということです。和語の「習う」に対し、「学習」という言葉を用意しておきます。「改める」という言葉があるのに「改革、改善、改良」や、「大きい」という言葉に対し、「巨大、膨大」のような漢字語を用意しておかないといけないということがありました。そして新しい概念は漢字語で訳出します。これは中国語の場合と同じ、2字語が一般的です。

日本語の近代化が蘭学時代から少しずつ行われて、明治に入ってから加速し、20世紀に入る前後に完成したということです。今日我々は、同じ意味でも二つの言葉で言えます。一つは和語で、一つは漢語です。

近代語彙の特徴付け：中国語と日本語

- ▶ 中国語では、1字語に対し、殆どの場合、同義の2字語形式を用意する。
- ▶ 日本語では、これまで和語に対し、漢字語を用意する。

ビッグデータで捉えた語の変化

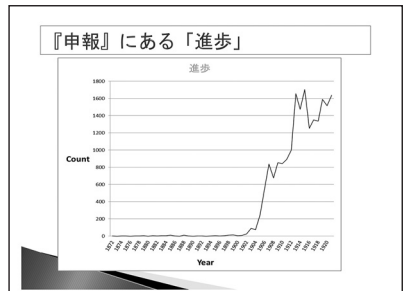
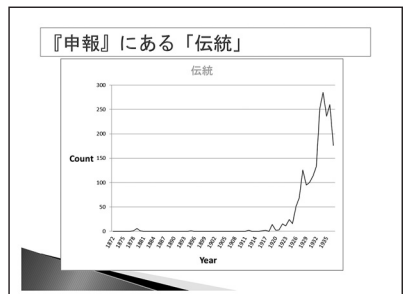
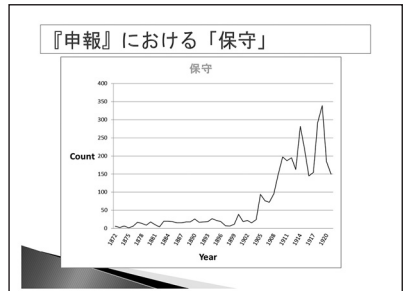
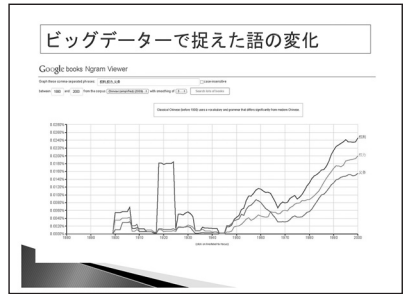
こういうことがなぜ分かったのか。最近、ビッグデータというものがあります。ビッグデータでは、多くの言葉を集めて、その中の使用頻度を見ることが非常に簡単にできます。例えば Google のページで、「権利」と「義務」

という言葉の中国語における変化を捉えることができます。こちらの図を見れば分かるように1900年、中国の書物において2つの言葉はどちらもほとんど使用例がありません、その後、急に使用率が上昇しました。日本の影響を受けたためです。

これは、中国の新聞の『申報』です。『申報』は、1872年から発行された新聞です。「保守」という言葉の変化を見ますと、1904年を境に使用例が急増したことが分かります。「伝統」という言葉も同じです。『申報』では19世紀の間はごく僅かしか用例がなく、急増したのは1917年です。日本のこの曲線と重ね合わせると相関関係が見て取れます。

日本は、「伝統」という言葉は、明治天皇が亡くなってから急に使うようになりました。明治時代は非常にすばらしい時代で、それが幕を閉じることに日本人は大変残念がっていました。「伝統」という言葉はこのような気持ちを代弁していたでしょう。急に使われるようになりました。英語の tradition の訳語にもなりました。中国語は、その影響を受けたのです。

「進歩」もそうですし、「改良」もそうです。中国でよく使う常用二字語100語の中で「圧力」「栄養」「衛生」「演習」「炎症」「化学」「化石」「科学」「解剖」「改革」という言葉が、急に動き出すのが1904年前後です。それまでは、使用例が、皆無か非常に少ないのです。



執着心のようなものです。一着、二着ではだめで、場面に応じて服をどんどん変えたりします。言葉も同様です。「優秀」だけでは満足せず「優良」も「卓越」も欲しがります。

中国ではどうかというと、『申報』での使用例は、1906年はゼロ、1907年は2語、1908年は1語ですが、1911年には急に57語に増えました。日本は、1909年辺りから増え始めていますので、日本より一歩遅れて増えた様子が見て取れます。

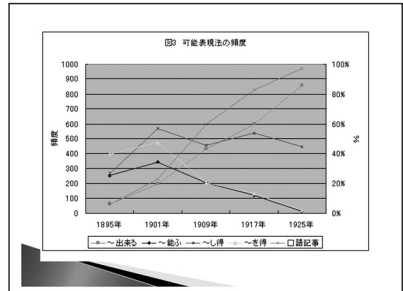
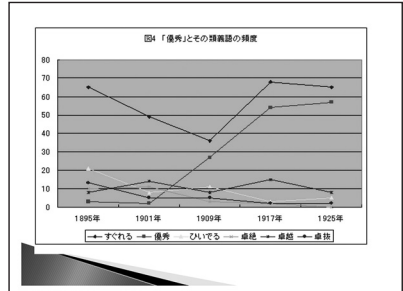
中国には、もともと「好、佳、秀」という語があります。ただし、2字語を用意しておかないといけないので、日本語にある「優秀」「優良」「卓越」などを拝借したり、触発されたりするわけです。

ここにもう一つの例があります。「可能」という語です。可能の表現は、「できる」と「可能」がありますね。この「可能」は、明治に入ってからできた言葉です。江戸時代は不可能を「能はざる」という否定の形で表現しましたが、明治時代に入って「能ふ」という肯定の形も一般に使われるようになります。また、「能ふべき」という形が現れました。

今日我々が「お酒を飲んでも、車の運転が可能ですよ」と言えば、警察が怒りますが、「できる」の代わりに「可能」という言葉を使うこと自体は何の問題もないですね。

終わりに

今日、我々が使用している漢字語は、漢字文化圏における「環流」の結果です。交流ではなく「環流」です。中国で造られた語が、日本に渡って、日本で新しい学問体系に組み込まれたのち、また中国、或いは朝鮮半島に渡り、共通の言葉になりました。そのような言葉は「共通語」と言ったり、あるいは「国際語」と言ったりすることができます。「国際語」と対峙する言葉は「文化語」と言います。例えば、「畳」は訳すことができず、音訳語の形で中国



語に入らざるを得ません。文化的な言葉はたいてい訳せないのです。しかし、「大学」「国際」「政府」といった言葉がありますね。このような語は簡単に他の言語に訳せます。これは、世界的な規模での知識の共有につながります。近代の漢字語はこのような性質を持っています。

総括としては、まず近代における日中語彙交流は、西洋文明の受容をバックグラウンドに展開された文化事象であるということです。言い換えれば、東洋が如何に西洋を受け入れたかが言語面における現れです。

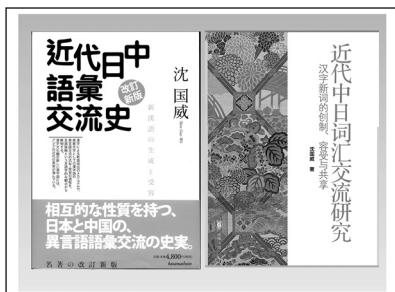
第二に、新しい漢語の創造、移動、普及、定着を記述することは、中国や日本、ひいては東アジアの近代に関する記述に繋がります。

そして第三に、研究の視野を漢字文化圏に広め、東アジアを対象にする必要もあります。中国と日本、そして韓国も加えなければなりません。私たちは正に日本、韓国の研究者と協力してこの方面の研究を進めているところです。ベトナムの研究者とも協力関係を確立する必要があります。ベトナムは中国経由で新しい漢字語がかなり入りましたが、詳細はまだ分かりません。しかし、ベトナムの近代思想、文学、歴史の流れを捉えるには、このような言語の面からのアプローチがどうしても必要であると考えております。

以上で、私の話を終わります。ご静聴ありがとうございました。

終わりに

- ▶ 近代における日中語彙交流は、西洋文明の受容をバックグラウンドに展開された文化事象である。
- ▶ 新漢語の創造、移動、普及、定着は、日本と中国の近代を素描する。
- ▶ 視野を漢字文化圏に広め、東アジアを対象にする必要がある。



SHEN Guowei
(関西大学外国語学部教授)